

「ファイト・ルートヴィヒ・フォン・ゼッケンドルフ」
『有名な学者のこぼれ話と著書に関する情報』
(第十七巻、一七五八年、ハレ、出版、Ch・P・フランケン)

ヨハン・ペーター・ニケロン著
フリードリヒ・エバーハルト・ラムバ編
川 又 祐 訳

フォン・ゼッケンドルフの家系は、全フランケン地方のうちでも、きわめて数の多い、最古の、そしてとても有名な貴族の家系に属している。「それには」十の系統が見られ、この点に関して彼の家系には、特別な屋号が与えられていた。というのも、ザインスハイム家 (die Seinsheimer) が最古の家、アインハイム家 (die Einheimer) が最も堂々とした家、クルムバッハ家 (die Krumbacher) がとても裕福な家というように、ゼッケンドルフ家 (die Seckendorfer)

は、最大の家と呼ばれてきた。こうしたゼッケンドルフの家系の長い歴史に対しては、きわめて小さな疑念さえない。一〇四二年から一四八七年まで旧ドイツの騎士馬上試合では、抜きん出たゼッケンドルフ家の三五人が見つかる。そして一四七七年にはその三二人が見つかる。それは、この家の特別な結びつきを表している。かくして、数世紀にわたって、ゼッケンドルフ家が最上級の官職に就いてきたことが説明できるのである。ブルヒャルト・フォン・ゼッケンドルフ (Burchard von Seckendorf) は、一二三九年皇帝ルートヴィクス・バヴァルス (Kaiser Ludovicus Bavarus) 、そしてニュルンベルクの城伯ヨハネス (Burggraf von Nürnberg, Johannes) から側近に取り立てられた。エーレンフリート・フォン・ゼッケンドルフ (Ehrenfried von Seckendorf) は、フランケンのラント平和令長官 (Hauptmann des Landfriedens zu Franken) であった。そしてヴュルツブルク司教とニュルンベルク城伯との間に生じた係争解決に大きく貢献した。ハインリヒ・フォン・ゼッケンドルフ (Heinrich von Seckendorf) は一四一四年、コンスタンツ公会議に出席した。アペル・フォン・ゼッケンドルフ (Apel von Seckendorf) は、一五〇七年、帝室裁判所陪席判事 (der Kaiserliche Cammergerichtsassessor) に任命された。様々の宮廷つき式部長官 (Marschälle) 、顧問官 (Räthe) 、管区長 (Amtshauptleute) 、あるいは教会における司教 (Bischöfe) や高位聖職者 (Prälate) であった人たちについては、「ここでは」言及しないでおく。

私たちのファイト・ルートヴィヒ・フォン・ゼッケンドルフ (Veit Ludwig von Seckendorf) は、オーバーツェン領主 (Erbherr) 、ヘアツオーゲン・アウラハの地方長官 (Landshauptmann) 、そしてバンベルク司教の主馬頭 (Stallmeister) であったヨアヒム・ルートヴィヒ・フォン・ゼッケンドルフ (Joachim Ludwig von Seckendorf) ⁽¹⁾ の息子であった。彼の母は、マリア・アンナ・フォン・ブルテンバハ (Maria Anna von Burtenbach) といい、シエルテル・フォン・ブルテン

バハ (Schertel von Burtenbach) の孫であつた。シエルテルは、シュマルカルデン戦争において豪勇さで拔きん出て、彼のことを歴史家のトゥアヌス (Thuanus) や、スライダヌス (Sleidanus) そしてホルトレーダー (Horleder) は、きわめて賞賛すべきと言及した。こうした両親から、彼は一六二六年十二月二十日、ヘアツオーゲン・アウラハに誕生した。彼には二人の弟が続いた。すなわち、クヴィリヌス・フォン・ゼッケンドルフ (Quirinus von Seckendorf) とハインリヒ・ゴットロープ・フォン・ゼッケンドルフ (Heinrich Gottlob von Seckendorf) である。前者は一六二四年 (sic)、後者は一六三七年に生まれた。⁽³⁾ 後者に対して私たちのゼッケンドルフは特別の愛情を示した。彼の学校や大学の面倒を見て、ゴータとプファルツ宮廷における重要な業務の役に立たせたのである。

ゼッケンドルフ自身の教育については、大部分、彼の母親に感謝しなければならないかった。というのも、彼の父は三十年戦争でスウェーデン国王に仕え、出征したからである。そして母でありヨアヒムの妻は、戦争の騒乱のために各地を転々としなければならなかったので、彼は、ある時はコーブルク、ある時はミュールハウゼン、ある時はエアフルトで有能な教師に委ねられた。彼らの指導のもと、彼は自分の偉大な才能で、当時の悲しい時代の運命に逆らつて、成功することができた。すなわち、彼は年齢十歳にしてラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語をおおよそあやつり、そして数学に取りかかった。この結果、彼はゴータ公であるエルンスト敬虔公 (Herzog zu Gotha, Ernst der Fromme) の知るところとなり、公は、彼を一六三九年コーブルクのギムナジウムに連れて行き、同地で彼を極めて徹底的に教育した。そして、公の少なからぬ激励を受け、この地で、ヴェルテンブルクの居宅から来ていた二人の皇子と勉学を共にした。称賛すべき公がこの二人の教育を引き受けていたのである。それに続いて、彼はゴータのギムナジウムに入学し、当時の有名な校長アンドレアス・ライヤー (Andreas Reyer [Reyher]) の監督に委ねられた。ライヤーのもと、

彼は二年間で、大学に十分に入学できるまでになった。そうするうちに、彼の父が一六四二年、ザルツヴェーデルで命を失った。そのことが、このように勉強を継続する手段を彼から取り上げたのである。だが彼は、スウェーデン軍指揮官トアシュテンゾン (Torstenson) にちょうどうまく紹介されることになった。トアシュテンゾンは、ゼッケンドルフの母に恩給を受けさせてくれた。スウェーデン女王クリスティーナ (die Königin von Schweden, Christina) は、父親「ヨアヒム」の偉大な功績を考えて、父の最期「(の分)」までの恩給を母親に認めた。まったく特別な後援者を彼は、將軍モルテーン (Mortaigne) に見出した。モルテーンは彼をシュトラスブルク大学に通わせ、当時有名な教師レープハン (Rebhan)、タボール (Tabor) そしてベークラー (Böcker) の大きな利益のある授業を聴講させた。この地で彼は、三年間を過ごし、そして教員全員一致の成績証明書によって、公式の要職を十分司る能力を有していると認められた。

まず最初に、彼は、自分のこれまでの証明済みの勤勉さによって報酬が見つけれられることを期待して、ヘッセン・ダルムシュタット宮廷に問い合わせた。当時の方伯ゲオルク二世 (Landgraf, George der zweite) は、彼を軍務で使おうとし、彼をそれゆえ、近衛兵隊准士官 (Fähnrich) に任命した。しかし、先に言及した將軍モルテーンは、方伯の決定に抵抗した。なぜなら彼は、ゼッケンドルフであれば他の宮廷や官職をもっとうまく司ることができるであろうと見ていたからである。そして彼は一六四六年ダルムシュタット宮廷を去り、エアフルトへ赴いた。だがこの旅行中、彼はゴータに再び紹介され、寛大にも数年前、コーブルクでの教育に配慮してもらっていたエルンスト公から、愛顧を受けながら迎えられた。当該君主は、自分が若きゼッケンドルフに対して、大きな仕事をしてくれるであろう素晴らしい素質を、そして敬神や美德を愛する心を見つけていたことを忘れていなかったのである。公は、ゼッケンドル

フに対して宮廷説教師 (Hofprediger) クリストフ・ブロンコアスト (Christoph Bronchorst) を通じて、君侯参議官 (Fürstlicher Rath) や小姓 (Hofjunker) の役割を受け入れるつもりがあるかどうか、提案した。なるほどこれでは、私たちのゼッケンドルフの偉大な才能に対してはいささか物足りないと思われる。だが敬虔な君主は、ある部分では、ほんの二十歳に達したばかりの当時の彼の年齢を認識していたのであり、ある部分では、こうした地位に就く場合、ゼッケンドルフをあらゆる仕事から解放して、より重要な職務への準備がますますできるようになればならなかったのである。こうした意図がうまくいけばいくほど、彼はこの賢明な君主から愛され、教育を受けることになった。ほとんど得ることのなかった幸福感が彼にもたらされ、その上、君侯蔵書が毎日、彼に開かれていた。彼は、君侯の最重要な参議官のもとへ自由に入室することができるようになり、大学や文献が教えてくれないものを彼らとの交わりから修得していった。彼の特別な特権には、彼が日曜日にエルンスト公を訪ね、公に対して、ゼッケンドルフが有益な事柄を講義し、説明し、それらに関する自分の考えを披露し、時には、宮廷法、国家法の重要な諸疑問に答えねばならなかったというものがある。この君主は、ゼッケンドルフに自分の勉強ができるよう、時間を分け与えた。そうした指導の結果、彼は、午前中は共通法の修得、午後には、系図学、歴史学、地理学、神学、哲学、とりわけ数学に取り組みねばならなかった。これに加えて、大部分のヨーロッパ諸言語の知識は、彼にとつて有益であった。それらをすべて、英語のみを除いて彼は理解していたが、その漏れを彼はとても残念に思っていた。この時期に、彼は、広範で、およそ貴族には並外れた学識を獲得しただけではなく、さきほど言及したゴータの宮廷説教師クリストフ・ブロンコアストとの親密な交際を通じて、彼自身の告白に従えば、それが彼の重要職務の迅速な執行に大きな影響を及ぼしてくれたという形で、ゼッケンドルフの敬神と美德とが強固なものにされていったのである。その際、彼は、

それが廷臣に要求されるような、外面上、彼の肉体や、姿勢そして運動を快適にしてくれるものを怠ることはしなかった。それゆえ彼は、ゴータ宮廷を訪問した全員から高く評価されることにもなった。彼がこうした資質により、エルンスト公を満足させ、それを増大させたとき、彼は、一六四八年、数多くの侍従 (Cammerherr) の中に迎えられた。しかも、公からは、より多くの、より重要な仕事を依頼されるようになった。そして、この時期、ヴェストファーレン和平の実務を扱うために、この君主〔エルンスト公〕は、ゼッケンドルフを外国宮廷や、スウェーデン將軍ヴランゲル (Wrangel) への大使として用いた。当時、ヴランゲルの軍は伯爵領グライヒェンにいた。オルトルーフ市に害を加えないようにというゼッケンドルフの抗議により、將軍は移動していった。総じて彼は、まわりくどい支離滅裂な文書から明瞭な報告を行うことができただけでなく、困難な事態でも賢明で、目的達成に役立つ助言を与えることができたことで、エルンスト公からの信頼を獲得していった。

彼の名前と功績は、外国においても、一六五〇年バイロイト辺境伯エルトマン・アウグスト (Marggraf von Bayreuth, Erdmann August) から、自分の皇太子クリスティアン・エルンスト (Christian Ernst) の外国旅行へ同行するよう所望されるほど、有名となっていた。だがゴータ公エルンストは、半ば彼がいなくても不自由することはなく、半ば外国への旅行も重要視することはなかったが、ゼッケンドルフを自分の宮廷から去らせはしなかった。ゼッケンドルフは、こうした自分の主君からの拒絶を悔しがることはなかった。なぜなら彼は一六五一年、枢密参議官コレギウム (Geheimerathscollegium) に迎えられたからであった。それは、彼が、偉大な法学者であった四人の枢密参議官による厳しい試験を受けて、彼ら全員からこの昇格にふさわしいことが確かめられた後のことであった。一六五六年、彼は公の領地を一人で監督することを任された。そして、エルンスト公にとってゼッケンドルフはどれほど素晴らし

い価値があつたのか、またゼッケンドルフ氏自身が、『君主国』の中で認識力の検証をどのようにして行つたのか、を考察してみれば、この役目にどれほどの名誉があることなのか、たやすく認めることができる。今言及した勤めに、一六五六年にはアルテンブルク公からゼッケンドルフに対して依頼されたイエナ宮廷裁判所裁判官 (Hofrichter zu Jena) の役職が加わつた。それを彼は手際よく、誠実に行つた。それは、公文書館の文書によって現在でも立証することができる。

そうした定評のある誠実さで、彼に対するエルンスト公の信頼は増大していった。それゆえ、一六六三年ゴータのカンツラー、ヴィルヘルム・シュレーター博士 (Doctor Wilhelm Schröter)⁽⁴⁾ が亡くなつたとき、君侯はゼッケンドルフを最高ランデスコレギウム長官 (Director seiner höchsten Landescollegien) に昇格させた。彼は、とても勤勉で、誠実で、「仕事に」飽きることがないことを証明し、また尊敬の念を獲得していき、彼はいわば、彼の年代「の誰」よりも勝つていったのである。なお現存する記録によつて、あまりに明白にかつ本当に、ある疑問に引き込まれてしまう可能性が大きく示されている。

ひとはおそらく、どのような経緯であつたのか不思議がるかもしれない。つまり「その疑問というのは」、君主「エルンスト公」に妬みを覚えさせるまでの人物であつたのに、また彼にはゼッケンドルフ以上の家臣を望むことができなかつたのに、このゼッケンドルフが、どのようにして「職務の」免除を申請して認めてもらえたのか、である。だが、自分の君主からの愛顧を失つてはいないのに、この免除を申請するには、十分で特別な原因があつたのである。主たる原因の一つは、ゼッケンドルフが多過ぎるほどの仕事を依頼されていたからで、「誰にも」侵すことのできない忠実さを備えていた彼は、それらをあえて行ふ自信がなくなつた。なканずく、彼は、多くの並外れた仕事に求め

られていたのである。エルンスト公への勤めを免除してもらうことは、三人の高貴な帝国君侯が自分に仕えるよう文書で要請した以外、ほとんど知られることはなかった。申し出てくれたこの三人のうち、彼は、ザクセン・ツァイツのモーリッツ公 (Herzog Moritz von Sachsen-Weitz) から行われた申し出を選択して、公のもとで、提示されたカンツラー (Canzler) と宗務庁長官 (Consistorialpräsident) の地位に就いた。その地位は、ヨハン・ハインリヒ・メーネ (Johann Heinrich Meene) が身体の状態が弱ってしまったので辞職したものであった。メーネは、その後すぐに生涯を閉じていた。仕事が多様多様であったことが、彼がゴータ宮廷を去った理由であった。彼は、この地での仕事は「以前の量」より少なくなつたわけではない。なぜなら、彼の偉大な能力であればすべてが要求できると考えられたからである。それゆえ、言及したモーリッツ公は彼の勤めに完全に満足することができただけでなく、別の宮廷から、この尊敬すべき人物に勤務するよう要請が行われたのであった。ボヘミアへの旅行で彼は、君主ロプコヴィッツ (Lobkowitz) から皇帝レオポルト (Kaiser Leopold) に紹介された。皇帝は、しばらくの間寛大にもゼッケンドルフの相談にのってくれた。その際、彼は有名なランベキウス (Lambecius) とも知り合いになった。彼とゼッケンドルフはその時以来、学術的な文通を行っている。

これに続いて、ザクセン選帝侯ヨハン・ゲオルク二世 (Churfürst von Sachsen, Johann George der zweite) が、一六六九年ゼッケンドルフを自分の枢密参議官に任命して、相当の俸給を定めた。それによってゼッケンドルフは、イエナ宮廷裁判所裁判官の職を辞するよう説得された。何度も言及したザクセン・ゴータのエルンスト公の死去によつて、ゴータの宮廷とはすべてのつながりがなくなった。その後継者フリードリヒ (Friedrich) は、ゼッケンドルフの功績を十分に知っていた。そして愛顧を以て自分の家臣としてゼッケンドルフに彼の領邦を今後手助けするよう

所望した。「だが」この時期、フォン・アインジューデル (von Einsiedel) が没したので、彼は、領邦長官 (Landschaftsdirektor) に任命された。そしてすべての領邦等族から大きな尊敬を受けることになった。わずか数年後、枢密参議官そしてアルテンブルクのカンツラーであったヨハン・トーマス博士 (Doctor Johann Thomas) が亡くなった。その空位となった職が改めて彼に与えられることになった。こうして彼は、アルテンブルク領邦や、そしてその収入と支出の調査を行ったので、全力を挙げてこの領邦の最善に関心を払った。そしてそれらの文書を書き上げたのである。それによって彼は多くの栄誉を手に入れた。そして、他の人たちには多くの光明を与え、その人たちには他領邦の財政制度の研究が課されることになった。彼に差し迫る年齢と、そして多くのばらばら状態「にある仕事」から精神を集中して、人生の残りを静かに過ごしたいという決意とによって、アルテンブルクでの仕事にもっとせつせと打ち込むために、ツァイツ公に対して彼への勤めを免除してもらえよう彼は自ら動いた。だが彼はこの免除を受け取ることとはできなかった。かえってゼッケンドルフは、モーリッツ公に対して、公が政権についている限り仕えることを約束しなければならなかった。ゼッケンドルフは仕事をすることで公に改めて報いたのであった。それゆえ、言及してきたモーリッツ公が一六八一年に没したとき、ゼッケンドルフは、終止符がやって来たと考えた。そこで彼は一六七七年に獲得していた、アルテンブルクから離れてはいない領地モイゼルヴィッツ (Meuselwitz) に赴いた。モイゼルヴィッツは、その自然と人為によって快適な休息場に仕上げられると思われた。彼は同所に存在する美しい城館を建設して、彼は、宮殿の騒音から遠ざかり、宗教の真実についての考察と、身に迫る永劫とに取り組んだ。それに関してゼッケンドルフは、『ルター主義史』の序文で説明した。この地で彼は、およそ七年間を過ごし、すべての公式の仕事から最期まで自由でありたいと、ある種考えていた。しかしながら、ゼッケンドルフは、その偉大な性質、

誠実さ、知性、経験のゆえに、当時のブランデンブルク選帝侯、後のプロイセン初代国王フリードリヒ (Friederich) の知るところとなり、国王は、新しい重要な職を彼に要請した。上述の選帝侯によって新しいハレ大学が創設され、この新しい大学でカンツラーという要職に就いてくれる人物が探し求められたとき、ゼッケンドルフに勝る有能でふさわしい者は考えられなかった。ゼッケンドルフは一六九二年、この地位への招聘を受諾し、快適なモイゼルヴィッツを後にした。そしてハレへ赴いた。彼が選帝侯の愛顧を確実に取りつけることができたように、開学した大学の成功を促進することに全力で尽くした。それに対して、一方は新学部、他方は市当局との間で生じた大きな意見の相違によって大変な障害が現れた。かくして彼はこれを調停することに全力を尽くした。選帝侯は、ゼッケンドルフの提案を受け、特別の委員会にその調査を指示した。その長に選帝侯はゼッケンドルフを自ら任命した。ゼッケンドルフは、今後、危険なこうした軋轢を調停する称賛すべき労苦に身をささげた。変わることをのまない公平さを、彼は、間違っているそれぞれの当事者に対して示した。問題の本質に対する彼の洞察によって、そして今言及した彼の公平さによっても、彼は大きな信頼を獲得した。彼はその争いを終わらせ、その調停によって彼は、自分の人生にきわめて強烈な喜びが呼び起こされていった。彼によって、独特の和解が行われた。その和解は、それが選帝侯によって承認された後、ハレ市教会の聖職者たち全員で読み上げられた。その新しい大学がこの優秀な人物の管理、保護をもらって受けられないということ以上に遺憾なことはなかった。というのも、今言及してきた委員会の終了後ほどなく、彼は猛烈な結石症の痛みに襲われた。それを鎮痛させるためにきわめて有名な医者たちがかかるほど可能な限り尽力したのだが、その痛みは故あって取り除くことはできなかった。彼は、自分の生涯の最期がほど近いに他ならないと推測した。彼は、その最期の準備を模範的なやり方で行って、そしてまさにその日に、すなわち一六九二年十二月十八日に

没した。当日、彼によって作成された協定が公開で読み上げられた。彼の亡骸は、なるほど彼の所領モイゼルヴィッツへ運ばれた。だがそれにもかかわらず、ブランデンブルク選帝侯は、その固有の功績と特性の故に、ゼッケンドルフに対する追悼説教をハレで行うよう命令した。それは、当時の神学教授、後の僧院長ブライトハウプト (Abt Breithaupt) が行った。

ゼッケンドルフは、生涯で二度結婚した。最初はエリザベート・ユリアナ・フォン・ヴィパッハ (Elisabeth Juliana von Vippach) 嬢と結婚した。彼女は、テューリンゲンの古い貴族の一門の系統を引いていた。彼女とは二人の娘をもうけた。そしてその二人は、一六八四年その死去によってゼッケンドルフからもぎとられてしまった。二度目は、彼はゾフィア・ズザンナ・フォン・エンデ (Sophia Susanna von Ende) 嬢と結婚した。彼女は、ゼッケンドルフに一人の息子を一六九〇年もたらした。だが、息子は一六九五年またしても亡くなってしまふ。

有名なトマジウス (Thomasius) は、この多大な功労者の性格を次のように描写した。偉大なる神が君侯然たる徳で飾った貴族。非常に古くからの、そして八百年の有名な貴族の一門の誉れ。不実なき賢明な宮廷人。腹立たしさのない尊敬すべき翁。学者たちの強大な後援者、同時に学者たちの最も高貴な指導者。愛情に満ちた夫。みなしごの父親。困窮者たちの庇護者。彼の使用人や臣下の避難所。全ラント、侯国、選帝侯国の熱望。誠実なる人物。利己的な吝嗇家の敵。思ひ上がった高慢の鎮圧者。有害な悦楽への戦士。下卑たお世辞の反対者。そして、呪うべき無神論の、嫌われし不倶戴天の追跡者、などなど。

この有名な人物の著述は今でも挙げられなければならない。それらの内在的価値が、今日まで学界において尊敬の念を起こさせてきたのである。それらのうち、次のものを挙げなければならない。

1. *Commentarius historicus et apologeticus de Lutheranismō ...* Francofurti et Lips. 1692. 解説省略

2. *Teutscher Fürstenstat.*

本書は、ゼッケンドルフ氏が出版した初期の文献の一つで、しかも非凡なる初めての書籍である。彼は、本書においてドイツ領域の状態を研究し、国家叡智の法則に則ってそれらを評価している。彼は、統治者と臣民がどのような関係にあるのか、両者はどのような義務を負っているのか、そして、臣民の福祉は、君主の特権と共にどのように存在するのか、を提示している。本書は、宮廷や大学で大きな功勞を立てた人々からの称賛を受けた。こうしてひとは、本書を、それを用いて人々を教育するための教科書とした。彼らは、偉大な主君やその領邦に有益な仕事をするのが可能となったのである。本書は、何度か刊行された。その最良版は、ビーヒリンク (Biechling) によって一七二〇年に手配され、様々な、莫大な補足で増補された版である。⁽⁵⁾そして反対に、一六五八年に刊行された版は、最も悲惨な版で、ゼッケンドルフ氏にとってきわめてひどい誤植の故に、まったく耐え難いものであった。⁽⁶⁾それにより、彼は、一六六四年に、補遺を付けた別の版を企画する気になったのである。⁽⁷⁾

3. *Justitia protectionis ...* 1663 in 4.

本書と、次の書名の弁明書 *Repetita et necessaria defensio ...* 1664. とは連結している。ザクセンの諸公、テューリンゲン方伯、マインツ大司教間の争いは非常に古く、ルーデヴィヒ (Ludewig) によって報告されている (*Germania principe*. L.3. c.2)。だがそれらの争いが、一六六三年に再燃して、ゼッケンドルフ氏は、ある面ではこ

の争いの調査に関わる機会を与えられ、ある面では「その解決を」命じられた。それでも彼は、自分の名前をはつきり挙げることなく、これを処理した。彼の非難は、徹底的であったので、マインツ宮廷は困惑してしまい、また、ストラスブルクの有名な学者ベークラーが、相談にのり、その返答書を現実に作成しなければ、困惑し続けたであろう。その返答書は、根拠がなく、誹謗で満たされたものであった。ひとはそのことにますますびっくりしたに違いない。なぜなら、ベークラーは常にゼッケンドルフ氏の友人と見なされることを欲していたからである。ベークラーは、この文書に恥じ入った。そして、自分がその著者であることを世間から隠そうとした。彼は、ゼッケンドルフ氏が、*Repetita et necessaria defensio* を出版したので、静かに沈黙を守った。

4. *Defensio relationis de Antonia Burignonia, ... Lips. 1686.*

アントニア・ブリニオン (Antonia Burignon) は、女性狂信者の一人である。フォイストキンク (Feustking) は、自分の *Gynaeceum Fanaticorum* (sic) ⁽⁹⁾ に大量の狂信者を編集した。彼女は、様々な言語で本を書いた。そして大量のものをつなぎ合わせていったので、それをアムステルダムヴェトシュタイン (Wetstein) が一六八六年、十九部からなる著作に作り上げた。しかも、この著作をゼッケンドルフ氏が、厳しい検閲官であれば、全ページにわたって、不合理が指摘できたであろうにもかかわらず、ライプツィヒの『アクタ・エルディトルム』 (*Acta eruditorum*) で非常に寛大に論評した。だが、この寛大な論評も、ブリニオンのおべつか使い、ポアレ (Poiret) には耐えられなかった。ポアレは、この論評を攻撃して、まさに一六八六年、論評に *Montum necessarium* で対抗した。その中で彼は、数えきれないほどの誤りを著者「ゼッケンドルフ」のせいに行っているが、一つも証明はして

いない。ゼッケンドルフ氏は、少し前に示した論評への弁明を、これ以上争いに関わりあうことなく、作成した。その争いは、ブリニョンの狂信の故に生じたものであった。またそれについては、少し前に示したフォイストキンクの文書を参照することができる。

5. *Dissertatio historica et apologetica pro doctrina Lutheri de missa, edita a Casp. Sagittario Jenae 1686.*

この書には、ルターに関する失礼で恥知らずな中傷を一蹴する目的があった。それらは若干名のイエズス会士によつてねつ造されたものであり、一六八四年、コルデモア（Cordemoi）の著作『*Recit de la conference du Diable avec Luther*』によつて蒸し返されたものである。雑誌 *Histoire de la republique des lettres* の著者がこの書を批評したとき、有能な人物が、フランスで大きな喝采を得ていた本書を、健全で純粋な審美眼がつねにフランスで求められてはいなかったことを確実な証拠にして、論破してくれることを願った。ゼッケンドルフ氏はフランス語が意のままで、これまで存在しえた者以上にルターの生涯の歴史に、詳しくかったので、彼は、本書 *Dissertatio historica et apologetica* を著した。だが、彼がその著者として名乗り出なかったのには理由があった。それ故、彼は有名なカスパー・サギタリウス（Casp. Sagittarius）に、この版の面倒を見るよう要請した。だがゼッケンドルフは、その後、自分の *Historia Lutheranismi* の中で、自分がその著者であることを認めたのである。彼は、有能な人物に期待されるように、こうしたイエズス会士の嘘を明らかにした。この失敗作に満足していたコルデモアだけは除いて、多くの理性的なフランス人は次のことを恥じ入った。彼「コルデモア」がそれを多くの文書集に収録したこと、をである。それを彼は一七〇一年、次の表題で出版させた。 *Divers traités de controverse dédiés a*

Mad. Maintenon par Mr. l'Abbé de Cordemoy avec la refutation de la reponse d'un ministre Lutherien sur la conference de Luther avec le Diable.

9. *Bericht und Erinnerung auff eine neulich in Druck Lateinisch und Teutsch ausgestreute Schrift, im Latein Imago Pietismi, zu Teutsch aber Ebenbild der Pietisterey, genannt. Abgefasset Anno 1692 Monat Januario. Sambt einer Vorrede D. Philipp Jacob Speners. 1692 in 4.*

本書は、一六八九年以降、ライプツィヒでいわゆる敬虔主義のために生じた大きな運動の成果で、一六九一年、ドレスデン領邦会議で報告されたものである。同年の終わりに、匿名の人物が上述の著作『敬虔主義者の肖像』*Ebenbild der Pietisterey*を執筆して、様々な人たちが、とりわけシュペナー (Spener) をのしついていた。この下品な著作が送られたゼッケンドルフ氏は、同著に対抗して『報告と警告』*Bericht und Erinnerung*を著した。そして自分の名前が印刷されない場所での論文を発表した。それは、すべての理性的で中立的な人たちの賛同が得られた。そしてそれは厳密性と抑制とを以て執筆されたが、そのことが本書を賛同にふさわしいものにしたのである。本書は、その後一七一三年、ハレで彼の名前を出す形で出版された。

7. *Schola Latinitatis ... Gothae 1662 in 8.*

この教科書は、偉大な特性を持っているゼッケンドルフ氏にはつり合いが悪いと思われた。だが、その有用性や、その執筆を激励した天下に名高い君主の命令を考察すると、それは、全然つまらないものとは考えられないである。

う。敬虔なエルンスト公にとっては、学校の、特にゴータのギムナジウムの改善が心中にあった。その意図を達成するために、この本が執筆されねばならなかったのである。ヨブス・ルドルフ (Jobus Ludolf) が本書を著したということは証明できないにもかかわらず、ゼッケンドルフがこの当時の極めて経験豊かな学校教師をその仕事に利用したことは、可能性がないではない。本書の意図は、学校にだけではなく、大学〔進学〕への準備を有用なものにすることにも向けられていた。後のゴータ校長フォケロート (Vockerodt) は、自分の *Consultationes* の中で、本書の価値と利用法をありのままに紹介した。

8. *Christenstat ...* Leipzig 1685. 解説省略

9. *Compendium historiae ecclesiasticae ...* Lipsiae et Gothae 1666 [in] 8.

本書は、私たちの博学のゼッケンドルフに由来するのみならず、私たちはその際、何人か他の学者たちの精励、手腕に多くを負わなければならない。ゼッケンドルフは、旧約聖書の歴史を執筆した。だが、新約聖書の歴史を書き上げるには時間が足りなかったもので、この仕事をアルトポエウス (Jo. Christ. Artopoeus) に依頼した。アルトポエウスは、ベークラーの監督のもとで、それを非常にうまく行い、ヴェストファーレン平和条約の時代までの教会の出来事を新巻に継承した。本書全体用に、トライバー (Treiber) が索引を作成した。それに基づいて本書は、一六六六年に初めて発行された。とても有益な文書が、しばしば世界に知れ渡ることになるであろうことは、簡単に推測できた。それ故ひとは、一六九五年に第二版、一七〇五年に第三版が出版されるのを見たのである。だが、

後者は、前者よりも不出来とされている。とりわけ、後者には補遺が添えられたからであった。それは、その著者が非常に党派的であったと思われたので、誠実な人たちに賛同が得られなかったのである。私たちは、主としてここから、有名なキプリアヌス (Cyprianus) に期待する。彼は、この補遺にほとんど満足することはなかったので、彼自身、新しい版を考えた。それは、新約聖書の歴史をヴェストファーレン平和条約から彼の時代まで学術的に継続するもので、一七二三年に公刊された。この継続によつて、別の文書が誘発されていった。それは、一七二五年 (sic. 一七二六年) ハレで次の表題で出版された。 *Ordinis Theologorum in acad. Reg. Fridericiana episcipis apologetica in partem aliquam historiae ecclesiasticae recentioris, in compendio Gothano, novissime continuatae*. 本書では、キプリアヌスによつて批判されていた敬虔主義の争いが、弁明されることになる。

10. *Jus publicum Romano-Germanicum ...* Frankfurt und Leipzig 1687 in 8.

本書の著者「名」は挙げられていないので、当初は、ヘーア (Georg Achatius Heer [Heher]) がその著者であると考えられていた。だが今や、それはゼッケンドルフに由来していることが十分に知られている。彼は本書を、エルンスト公の皇子たちが使うもの、そしてもっと正確に言うところ、それがとても偉大な博識を備え、中立のものとなるよう構想した。それは四部から成り立っている。その第一部は、ローマ帝国の性質について、第二部は高貴な人たちについて、第三部は、ローマ帝国の国制について、そして第四部は、高貴な人たちの特権、権利、収入について扱っている。

11. *Capita doctrinae et praxis Christianae insignia ... a Philippo Jacobo Spenero, ... Francofurti ad Moenum 1689. [in] 8.*
故シュペーナー博士の説教集は、彼が執筆して講演するやいなや、一六八〇年にドイツ語で出版され、そして、この有名な神学者の比較的大きな本書に次のものが編入された。その書名は『活動的なキリスト教精神の必要性和可能性』(*Des thätigen Christenthums Nothwendigkeit und Möglichkeit*)である。その中で論究されている問題の重要性、そしてその大きな有用性によつて、私たちのゼッケンドルフが一部は、自分自身の精神修養に、一部はドイツ語に詳しくない、そしてこの比較的重要な著作を所有していない人たちの最善になるよう、ラテン語に翻訳した。本書は、著者としても翻訳者としても偉大な名誉をもたらしてくれた。後者については、これほど偉大な人物「ゼッケンドルフ」が彼「シュペーナー」の書を翻訳したからであり、前者については、ゼッケンドルフは、キリスト教の拡大に尽力した神学者の手本をまねたからであった。

12. *Teutsche Reden ... Leipzig 1686. [in] 8.*

ゼッケンドルフが三十年間、様々な宮廷で就いた要職在任中、彼は、高貴なる君主の面前で晴れの講演をしなければならぬ機会が多々あった。こうしてまとめられていく講演を彼は、講演をする前にその都度、書き下ろしていった。彼は、それを一卷に集めて、友人の願いに基づいてついにそれを出版した。講演が高貴なる人たちの面前で行われるにもかかわらず、「とりわけ」君主の御前で講演しなければならない人間にとつて、有益な多くの事柄が不足していたので、これらはむしろ、雄弁のすべての愛好者にとつて役立つことができる手本となる。彼が本書に提供した政治講演の種類と活用に関する論述の中で、彼はこれに必要とされる特性を徹底的に詳述してい

る。さらに彼は、いくつかの補足も追加した。補足の中には、一部は、いくつかの講演、一部は、エルンスト公の命令で書かれた二つの論文である *De notitia juris civilis et naturalis*。一部は、ゼッケンドルフの大舅ヴィパッハ氏のいくつかの巧みな講演、が収録されている。以下省略。

13. *Politische und moralische Discourse* ... Leipzig 1695.

私たちのゼッケンドルフは、重要な職にあつて、また重要な職務を行わなければならなかったにもかかわらず、彼は、同時に有益で喜ばしいことに時間をいくつか割いた。ここではとりわけ、ルカヌス (Lucanus) の詩がふさわしい。それは、彼の友人の一人がゼッケンドルフにフランスからフランス語訳を持ってきたものであった。ゼッケンドルフは、それを、気持ちを鼓舞するために旅行に持つていくのが常であった。彼は、それらのいくつかを韻文でドイツ語に翻訳した。そしてとりわけ、ルカヌスの三百の示唆に富む格言を選別した。さらに彼は、政治的、そして道徳的考察を行った。彼の存命中は、本書を印刷に回すもくろみはなかった。にもかかわらずそれは、彼の最後の業績として、没後、出版された。私たちは、本書を誉めそやすため、多くの学者たちの証言を付け加える。以下省略。

これらは、極めて立派な文書である。すなわち、存命中の名声が偉大で流布していたゼッケンドルフ氏の不変の記念物は、彼の死後の思い出に祝福を与え、貴重で尊敬すべきものにしてくれるのである。

訳者あとがき

一 訳者はこれまで、カメラリストであるゼッケンドルフの評伝についていくつか紹介してきた（川又、一九九九、二〇一二、二〇二三）。ヨハン・ペーター・ニケロン（Johan Peter Niceron. 1685-1738）著、フリードリヒ・エバーハルト・ラムバハ（Friedrich Eberhard Rambach. 1708-1775）編『有名な学者のこぼれ話と著書に関する情報』に収められた本稿「ファイト・ルートヴィヒ・フォン・ゼッケンドルフ」も、それに連なるものである。本稿は、Niceron, Johan Peter. “Veit Ludwig von Seckendorf.”: *Nachrichten von den Begebenheiten und Schriften berühmter Gelehrten mit einigen Zusätzen* herausgegeben von Friedrich Eberhard Rambach. Siebzehnter Theil. Halle. Verlag und Druck Christoph Peter Franckens, 1758. pp. 300-343. を訳出したものである。これには実はすでに、次のフランス語版（一七三四年）が存在していた⁽⁹⁾。

Niceron, Jean Pierre. “Gui-Louis de Seckendorf.”: *Memoires pour servir a l’histoire des hommes illustres dans la republique des lettres. Avec un catalogue raisonné de leurs Ouvrages*. Tome XXIX. A Paris, Chez Briasson, Libraire, rue S. Jacques, à la Science. 1734. Avec Approbation & Privilege du Roy. pp. 48-58.

従って、本稿は、ニケロンのフランス語版（一七三四年）からドイツ語版（一七五八年）へ改編されたものを翻訳したことになる。元のフランス語表記に従うのであれば、著者表記は、ジャン・ピエール・ニセロン（Jean Pierre Niceron）とすべきであるが、ここでは、ドイツ語表記を採用している。ニケロンは、文壇における著名人の功績を簡潔な形でフランスに紹介することを目的として、その一人としてゼッケンドルフを取り上げた。しかしながらラムバハは、ゼッケンドルフに関する記述がフランス語版のページ数からもあまりにその内容が簡便であったため、

シュレーバー (D. G. Schreber. 1708-1777) の著作『ゼッケンドルフの生涯と功績』⁽¹⁰⁾を参照・抜粋しつつ、より詳細な記述を追加する形でドイツ語版「ゼッケンドルフ」を編纂した。本稿で、ドイツ語版を訳出したのもそこに理由がある。

フランス語版は、本文 (pp.48-51.) と「ゼッケンドルフの著作目録」 (pp.51-58.) の二部構成となっている。その目録では、

1. *Le Christianisme ...* (en Allemand) Lipsic 1685.

5. *Etat des Princes d'Allemagne, avec des Additions* (en Allemand) Francfort 1687.

という彼の主著『キリスト教徒国』初版と『ドイツ君主国』第五版を含めて、全部で十六点が紹介されている。⁽¹¹⁾ニケロンのフランス語版の重要性は、本文やこの目録からも分かるように、ゼッケンドルフの生涯と著作が一七三四年にはすでにフランス語で紹介されていたということにある。なぜならこれは、それだけ、ゼッケンドルフの名声がドイツ語圏のみならず、他言語圏であるフランスにも届いていたことの証左になるからであり、また、そこでの著作解説文は、ほんの数行に過ぎなかったとはいえ、ゼッケンドルフの著作をフランス語で理解することができたことになるからである。

非ドイツ語圏におけるゼッケンドルフの紹介に関しては、ニケロンにとどまらない。英語圏のものとしては、次の『新・総合伝記辞典』(第十巻、一七六二年)⁽¹²⁾がある。

「ゼッケンドルフ (ジ・ルイ・ド) は、非常に博識のあるドイツ人で、非常に古く高貴な家の系統を引いていた。そして一六二六年フランケンの町アウラハで誕生した。彼は、教養教育を大いに活かした。またフランス語、ラ

テン語、ギリシャ語そしてヘブライ語の精通者であったばかりではなく、数学や科学にも熟達していた。彼は若くして大きな進歩をとげ、ザクセン・ゴータのエルネストウス敬虔公 (Ernestus the pious) の耳に届くこととなった。この君主は、自分の子供たちと一緒に教育を受けさせるために、ゼッケンドルフがいたコーブルクから彼を呼び寄せた。彼は、二年間ゴータに滞在して、一六四二年ストラスブルクへ去った。しかし、一六四六年ゴータに戻り、公の名誉図書館員 (Honorary librarian) に任命された。その後一六五一年、彼は宮廷顧問官、教会顧問官 (Aulic and ecclesiastical counsellor) に任命された。そして一六六三年国家顧問官 (Counsellor of state)、総理大臣 (First minister)、宗務庁最高長官 (Sovereign director of the consistory) に任命された。翌々年、彼は、国家顧問官としてカンツラー (Chancellor) として、ザクセン・ツァイツ公モーリス (Maurice) に雇われた。彼は、ザクセン・ゴータ公に劣らず、この新しい主君に評価された。彼は公が亡くなる一六八一年まで彼と共に「仕事を」続けた。その後、彼はすべての業務から引退して静養と静謐の状態に入った。そこで彼は大量の著作を書いた。それにもかかわらず、一六九一年、ブランデンブルク選挙公フレデリック三世 (Frederic III) が、再び隠遁から引き戻し、彼を国家顧問官としてハレ大学カンツラー (Chancellor) に任命した。彼はこれら要職の受諾を避けられなかったが、それらを長く楽しむことはなかった。なぜなら彼は一六九二年十二月十八日、ハレで没したからである。それは彼の六六歳に達する二日前のことであった。彼は二度結婚しているが、息子は一人だけであった。彼「息子」は父の死後も生き続けた。ゼッケンドルフは外国語がよくでき、法律、歴史、神学を学んだ。そして彼は、まあまあ画家・彫刻師だったとも言われる。彼は大量の本を書いた。とりわけ、すばらしく利用されたものの一つは、一六九二年フランクフルトで、二巻本、二つ折りで公刊された。だが通常はそれは一巻本

に装丁されている。その表題は、『ルター主義の歴史的・弁明的注解』である。本書は、多くの点で非常に貴重であり、特に、その中に見いだされるいくつかのすばらしい記事、引用で好奇心がそえられる。ルターを意味するこの偉大な人物の歴史に完全に熟知していたのであれば、ゼッケンドルフの大部な本だけは読む必要がある¹³とベイル (Bayle) 氏は話している。それは、その種の中では最善書の一つである。それは、長期にわたって出版されたのであった。」

この項目も、記述は簡単で、ゼッケンドルフは官僚として、そしてそれ以上に『ルター主義の歴史的・弁明的注解』の著者である宗教学者として描かれている。カメラリストであるゼッケンドルフが各国の文献にどのように取り上げられ、紹介されているのか、今後明らかにしていくことは、官房学の伝播・受容という観点からとても興味のある課題である。

二 本稿ドイツ語版は、『ドイツ君主国』の版や刊行年などの表記に混乱はあるものの、その内容から二つの点で注目しなければならない。まず、ゼッケンドルフがエルンスト公宮廷での勤務を退いた理由はいまだ確定されていないが、ドイツ語版は、原典を明示することはないものの、多忙な職務とそれらの多種多様性をその理由に挙げている。第二に、ゼッケンドルフの直接の死因については記述されていないが、彼が結石症の病魔に侵されていたということへの言及である。これは、彼の末期に関する新たな有用情報となっている。

本稿もやはり、本文 (pp.300-313) と、著作の解説 (pp.313-343) という二部構成となっている。この二つでも同様に、焦点が当てられているのは、カメラリストとしてのゼッケンドルフというよりも、宗教学者としてのゼッケンドルフ

フである。それは、1. 『ルター主義の歴史的・弁明的注解』（pp.313-317.）や8. 『キリスト教徒国』（pp.323-337）などの解説に割かれたページ数の多さに現れている。だが紙幅の都合上、本稿ではゼッケンドルフの著作解説のうち、1. 『ルター主義の歴史的・弁明的注解』、8. 『キリスト教徒国』、12. 『ドイツ語講演』、13. 『政治的・道徳的論集』の解説文のすべてまたは一部を省略せざるをえなかった。なお、書名や刊行年などの表記は、原典に合わせて変更した個所がある。

最後に、ドイツ語版表題頁の前に置かれたゼッケンドルフ肖像画（口絵、図1）の作者は、ハレのグリュントラー（Gottfried August Gründer. 1710-1775）である。また訳者注で示されているURLは、二〇一六年一月現在の閲覧のものであることを記しておく。そして、訳文中「」の部分は、訳者が補ったものである。

訳者注

（1）ゼッケンドルフの父に関しては次のものを参照せよ。Brode, Reinhold. “Die schwedische Armee nach dem Prager Frieden und die Enthauptung des Obristen Joachim Ludwig von Seekendorf.” : *Jahrbücher der Königlichen Akademie gemeinnütziger Wissenschaften zu Erfurt*. Neue Folge. Heft 22. 1896. pp.113-153. 本稿では

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jparticle_00289110

で閲覧が可能である。

（2）ここに登場するヨハン・クヴィリン・フォン・ゼッケンドルフには次の著書がある。ただし、その著者名は、ヨハン・クヴィリンではなく、ハンス・クヴィリンとなっている。

Rede / Welche in dem hohen Saal / auff dem Fürstlichen Hauß Friedenstein ... Gehalten worden / Als der Fürstliche Körper Des weiland ... Johann Ernsten des Jüngern / Hertzogen zu Sachsen / : Christmilden Andenckens / Aus

obgedachtem Saal in die Fürstl. Hoff-Kirche getragen werden sollte. Den 11. Januarij 1658. Von Hanß Quirin von Seckendorff. Gotha Gedruckt durch Johann Michael Schalln.

(3) このゼッケンドルフ三兄弟の構成は、図2のようになる。

(4) このシュレーターの息子がオーストリアカメラリスト、ヴィルヘルム・フォン・シュレーダー (Wilhelm von Schröder, 1640-1688) である。

(5) ビーヒリンク編『ドイツ君主国』には、一七二〇年、一七三七年、一七五四年の各版がある。

(6) 『ドイツ君主国』第二版の刊行年は、一六六〇年である。

(7) 『ドイツ君主国』第三版の『補遺』は一六六四年に作成されているが、第三版の刊行年は一六六五年である。第二版、第三版の刊行については、川又 (二〇一六) を参照せよ。

(8) 本書は、*Gynaecium haereticum fanaticum* のことと思われる。

(9) フランス語版とドイツ語版はそれぞれウェブで閲覧が可能である。

<http://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=pst.000057707921;view=1up;seq=60>

http://reader.digitale-sammlungen.de/de/fsl/object/display/bsb10601746_00001.html

(10) Cf., *Nachrichten*, Vorrede, Signature: B¹ verso, B² recto.

(11) しかしながら、ドイツ語版はそれとは異なり、ゼッケンドルフの著書は十三点の紹介となっている。

(12) 原文も、"Gui-Louis de Seckendorf." *A New and General Biographical Dictionary, containing An Historical and Critical Account of the Lives and Writings of the Most Eminent Persons in Every Nation ...* Vol. 10. London. Printed for T. Osborne et alii. 1762. pp.309-310. である。本書は、

https://books.google.co.jp/books?id=eacDAAAYAAJ&pg=PA309&lpg=PA309&dq=A+new+and+general+biographical+dictionary+gui+seckendorf&source=bl&ots=38WSnHaUkl&sig=CKr073CNgoCKuaDCHv7an7t2ALU&hl=ja&sa=X&ved=0ahUKEwjzz46L1_DJAhWEG6YKHSb_BysQ6AEIIDAB#v=onepage&q=A%20new%20and%20general%20biographical%20dictionary%20

gui%20seekendorf&f=false

で閲覧が可能である。

- (3) ツールへの本文注記 (p.310) より、 “Bayle’s Dict. LUTHER” である。 Cf., Bayle, pp.948-949. ツールへの原典は、
http://books.googleusercontent.com/books/content?req=AKW5Qaeca3dVmlteXGej4W0gkVu8M7RqXdhOXsIhpVHx_APFAMun554rhg-mA3fxcWgSZiPS3BpS2TTbq6vBTyxAvVk6lkttz1RvYY-OtQTUPND11x3UUMbtqBvogpyHSUdYV1f66gNedFwTUill6deMkGWqSiAijJ0Oh5GoLScdfus-yajl1wIGu68mjOd-RBpdxDDsqZnUOvaWXtGbMBGjRXgvt1960oGi0thLB-Ao-zEgFUUbitzAH_EDU4SqR-5LfdvFqiQJEn_nQO+VH8CLX6zd5eyf5NQ1eQH75w4XcXATO54_gF-f-CkheJspdecFG
 で閲覧が可能である。

文献一覧

- Bayle, Pierre. *The Dictionary Historical and Critical of Mr Peter Bayle*. The Second Edition, ... Revised, Corrected, and Enlarged, by Mr des Maizeaux. Vol. the Third F _ L. London. Printed for J. J. and P. Knapton et alii. 1734.
- Kuntke, Bruno. *Friedrich Heinrich von Seckendorff (1673-1763)*. Mathiesen Verlag. Husum. 2007.
- Niceron, Jean Pierre. “Gui-Louis de Seckendorf.”: *Memoires pour servir a l’histoire des hommes illustres dans la republique des lettres. Avec un catalogue raisonné de leurs Ouvrages*. Tome XXIX. A Paris, Chez Briasson, Libraire, rue S. Jacques, à la Science. 1734. Avec Approbation & Privilege du Roy. pp. 48-58.
- Niceron, Johan Peter. “Veit Ludwig von Seckendorf.”: *Nachrichten von den Begebenheiten und Schriften berühmter Gelehrten mit einigen Zusätzen* herausgegeben von Friedrich Eberhard Rambach. Siebzehnter Theil. Halle. Verlag und Druck Christoph Peter Franckens, 1758. pp. 300-343.
- Schreber, Daniel Gottfried. *Historia vitae ac meritorum perillustis quondam Domini Viti Ludovici A Seckendorff* ... prostat Lipsiae in officina Brauniana. [1733].

“Gui-Louis de Seckendorf.” *A New and General Biographical Dictionary, containing An Historical and Critical Account of the Lives and Writings of the Most Eminent Persons in Every Nation ...* Vol. 10. London. Printed for T. Osborne et alii. 1762. pp.309-310.

パーナー著、川又祐翻訳「ゼッケンドルフと彼の教育・教授思想——十七世紀教育史論——（抄訳）」『秋田論叢』十五、一九九九年。
ルーゲ著、川又祐翻訳「図書館員から枢密参議官へ——ファイト・ルートヴィヒ・フォン・ゼッケンドルフ（一六二六—一六九二）がザクセン・ゴータ国に勤務した時代（一六四六—一六六四）における経歴の諸相」『政経研究』四九（二）、二〇一二年。

シュレック著、川又祐翻訳「ファイト・ルーデヴィヒ・フォン・ゼッケンドルフ　ザクセン選帝公・ブランデンブルク選帝公枢密参議官　ハレ大学初代カンツラー　一六九二年没」『政経研究』五十（二）、二〇一三年。

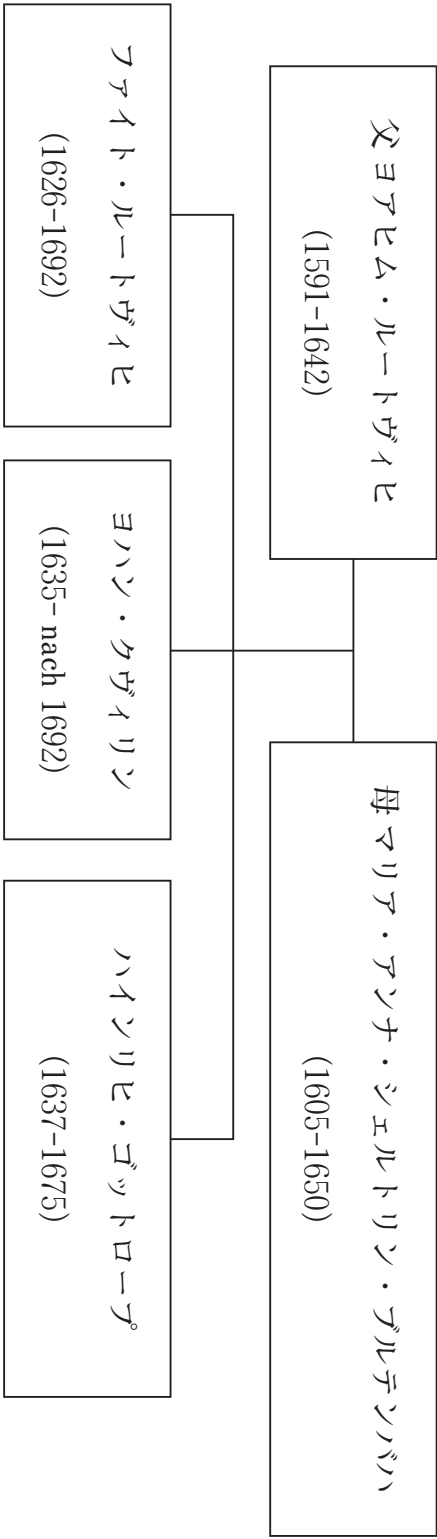
川又祐「ゼッケンドルフによる『ドイツ君主国』第三版出版の諸相」『法学紀要』五七、二〇一六年。

図1 ゼッケンドルフの肖像画（口絵部分）



Gründler sc. Halae.

図 2 ゼッケンドルフの兄弟構成



出典 Kuntke, Anlage 1, p. 395.